

# もうひとつのロビンソン・クルーソーの世界

——我流読書ノートの試み——

藤 田 貞 一 郎

## 目 次

- I 何故我流読書ノートを記すか
- II 『ロビンソン・クルーソーのその後の冒険』の世界
  - 1. アジア前近代貿易
  - 2. 中国・ロシア論
  - 3. 宗教論
  - 4. 環大西洋三角貿易
- III 『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』の基盤
- IV 時代の子, ロビンソン・クルーソー

## I. 何故我流読書ノートを記すか

ヨーロッパ各国の宮殿や王侯の建物を比べた場合、シナの建物はいったいいかなるものであろうか。イギリス、オランダ、フランス、スペインの世界的な商業と比べ、彼らの貿易はいかなるものであろうか。また、富、力、華やかな服装、豪華な家具、その他、無限といえる様々な生活様式に関していえば、われわれの都市に比べ彼らの都市はいかなるものであろうか。われわれの航海の規模、商船隊、強力かつ大いなる海軍に比べ、若干のジャンクや小形帆船が集まるにすぎない彼らの港はいったいいかなるものであろうか。わがロンドン市だけで彼

らの強大な帝国以上の貿易をいとなんでいるのである。(中略) 彼らの船について私がいったことは、そのままその武力や軍隊についてもいえる。彼らは戦場に二百万の軍隊を集結させることができるかもしれない。しかし、そのようなシナ帝国の全兵力をもってしても、ただ戦場を荒廃に帰せしめ、結局自ら餓死するぐらいがおちであろう。(中略) いや、三万のドイツ或いはイギリスの歩兵と一万のフランス騎兵をもってすれば、シナの全軍をほとんど壊滅させうる、と私がいったとしても、それはあえて誇張の言とはならないであろう。同じようなことが、わが要塞化された都市についても、都市の攻防に関するわが方の工兵の技術についても、いうことができる。ヨーロッパの一兵団の砲撃と攻撃の前に一カ月ともちこたえうるような要塞化された都市というものが、シナには一つもないのである。と、同時に、シナの全軍団をもってしても、兵糧攻めにでもしないかぎり、たとえばダンケルクのような都市を攻略することはできない。そうだ、たとえ十年間包囲しても、それは不可能であろう。彼らが火器をもっていることも事実だが、その火器たるやまことに扱いにくく、それに不体裁でもあり発射も正確ではないときている。火薬もあるが、全然威力はない。彼らには、戦場における規律というものがなく、武器を使用する訓練がなく、攻撃する場合の手練がなく、退却するに際しての冷静さがない。したがって、私が故国に帰って、みんながシナ人の力や富や光栄や荘厳さや貿易などについてひどくほめそやしているのを聞いた時、何ともいえない不思議な気がしたことを、ここにいっておかなければならない。

- 1 デフォー作・平井正穂訳『ロビンソン・クルーソー(下)』(岩波文庫本、岩波書店、1971年) 315-317ページ。以下、文庫本(下)と略する。Daniel Defoe, *Robinson Crusoe*, (An Everyman Paperback, Everyman's Library, 1945) p. 386. 以下、Everyman's と略する。

冒頭から長い引用となったが、これは『ロビンソン・クルーソーのその後の冒険』の一節である。著者ダニエル・デフォー（1660?～1731）は、主人公ロビンソン・クルーソーを1632年生れの人物として設定、彼が故郷ヨーク市を1651年に出郷し、まずはかなりの苦難を経てブラジルに渡り、そこで農園を経営した後、1659年ブラジルを出帆、帰国の途次、折悪しく暴風のための難破、絶海の孤島に漂着——ここでの28年余の生活が、わが国の少年向けの物語りにもとりあげられる周知の部分である——、1687年フライデイを伴ってイングランドに帰国、その後1694年甥のすすめもあって一介の貿易商として甥の船に乗り、東インド諸島へ渡るべくイングランドを離れ、再び冒険生活を経験しながらアフリカ・インド・中国を経てユーラシア大陸を横断して1705年にロンドンに帰着するという、年代を明示した物語として、これをまとめている。

前半部（すなわち第一部）『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』、後半部（すなわち第二部）『ロビンソン・クルーソーのその後の冒険』が出版されたのは、前者が1719年4月、後者が同年8月のことである<sup>2</sup>。

さて、冒頭に引用した部分で、デフォーはロビンソン・クルーソーの口を借りて中国文明批判を行っており、何ら恐るに足らずとし、ヨーロッパ文明の優位を主張している。同国人とは判断が違うというだけでなく、皆が何故私と同じ判断に立たないのかといたげな口振りに注目したい。イギリスがアヘン戦争で清朝の中国を屈服させるのは、はるかに下って1840～1842年のことであるから、この早さは何といっても関心を惹く。

アヘン戦争前の天保9年（1838）徳川斉昭の『戊戌封事』が「清国は何を申すも大国ゆえ、夷狄も容易に手を出し申すまじく、朝鮮・琉球等は貧

2 翌1720年には、第三部 *Serious Reflections on the Life* すなわち『ロビンソン・クルーソー反省録』が出版されている。が、読みづらいこともあってか、100万人に1人も読んでいないか、その名称さえ耳にしていなくてもあらうとされており、以後再版されることもないという。Everyman's p. xii. 本稿では行論でも明らかになる筈だが問題意識の点からもこれは対象としない。

弱の小国に候間、目にかけ申すまじく、左候へば、第一に日本をねらひ、次に清国をきりしたがへ候手順に御座候はんゆへ、実に憂ふべく悪むべき事に御座候<sup>3</sup>と記しているのに比べると、その後の歴史の流れから顧みて、デフォアの炯眼が印象深い。

ここで気がつくのは、これまでの多くのロビンソン・クルーソー理解は、この側面にほとんど注目して来なかったのではなからうかという点である。従来の代表的理解の例、またそれはそれとしてひとつの完成した形を示すものに、わが国の研究史には、「経済人ロビンソン・クルーソー」という卓抜な表現を与えた大塚久雄の理解がある。大塚の表現を引用する。

彼(ダニエル・デフォアのこと……藤田注)は、イギリス国民経済の實力が当時すでにオランダやフランスを凌駕して、まさに七つの海を支配しはじめようとしていると見ていたが、しかも、その實力の「根」は、国内の農村地帯に住んで、半農半工の形で、工業生産を営んでいる広汎な「中等の身分の人々」だとの確信をもっていた。そして、この見通しの正しさは、半世紀あまりのち、産業革命推進の中核となった人々がこの社会層から出ていることによっても証明されている。

ところで、彼が、ロビンソンという一人の人間の孤島における生活として描きだした生活様式は、じつは、いまいった中等の身分の人々のそれに酷似しており、その点から『ロビンソン漂流記』はそうした人々の生き方をユートピア的に理想化したものと考えられないこともない。もしそうだとすれば、その後広く読まれて人々に影響をあたえたといわれる『ロビンソン漂流記』は、当時のイギリスで、まさに将来を担う社会層——すぐれた意味での国民——のために人間形成の書という役割をはたした、といえるのではないだろうか。<sup>4</sup>

3 藤田 覚『天保の改革』、吉川弘文館、1989年、185ページより再引用。

4 大塚久雄「II経済人ロビンソン・クルーソー」同『社会科学の方法』、岩波新書、岩波書店、1966年、98ページ。

ここにみるロビンソン・クルーソー理解を、大塚久雄はその後も基本を変えことなく維持している。1977年出版の『社会科学における人間』<sup>5</sup>に所収された『『ロビンソン物語』に見られる人間類型』に明らかである。

大塚流理解は、実は氏にのみ限られない。本稿がその達意の翻訳からはかり知れぬ学恩を受ける平井正穂もそうである。1967年執筆の上巻の「はしがき——ロビンソン・クルーソーという人間——」では「このロビンソンという人間が、デフォーの、そして当時の読者の、つまりわれわれをも含めてであるが近代の人間の性格である『経済人』の、見事な人間像を示しているところにこの物語の迫力がある。そしてまた、ロビンソンが示すあの孤独感、周辺から疎外されて神との対話においつめられてゆくあの姿も、近代の人間の原型といえることができる。デフォーの人と作品についてはまだ語るべきことは多いが、それは下巻の『解説』にゆずらなければならない」(6ページ)としている。このような理解の仕方は、1971年執筆の下巻の「解説」でも、その基調を変えていない。「正直に言って、われわれが愛読し深い興味をそそられるのは、第一部(本書上巻)であり、しかもその中でも孤島でのロビンソンの生活の描写であることは事実である。そこでは、工作人・経済人としてのロビンソンの面目が躍如として示されており、したがって経済史家の興味と関心をそそるのは当然である。私が驚くのは、ロビンソンが厳格に数字をあげて、いつも勘定することである。」(412ページ)と述べ、その続きに、大塚久雄の論文を一部引用する。ところで、平井正穂によると、ダニエル・デフォーは、1720年出版の第3部『ロビンソン・クルーソー反省録』で、「第一部・第二部には、一貫して或る一つの主題がある」(下巻408ページ)といているという。とすると、どうしても我々は第一部に視野を限定するのではなくて、第二部にも視界を広げることが、ロビンソン・クルーソーの世界をその全体像に

5 大塚久雄『社会科学における人間』、岩波新書、岩波書店、1977年。

において把握するための基礎作業として必要であるといわざるを得ない。注2に記したように、現在の筆者の能力の限界から第三部に全く目を通すことなく、この我流読書覚書をまとめていくわけではあるが、第二部を翻訳し、第三部をも知識におさめている平井正穂の「解説」が、以下に筆者が指摘するロビンソン・クルーソーの世界に全く留意せず、わずかにカトリックもプロテスタントもともに参加できる普遍的な教会を構想する「愛(チャリティ)という理念に、デフォーのあらゆる行動と思想と作品の基調がある」(420～421ページ)として形而上の世界にその理解をとどめてしまっているのは、問題意識のちがいとして片付けるではすまぬものがあると私は思う。

大塚久雄・平井正穂流の、第一部に見事に描かれている、自立した個人という近代的人間像の世界に、ロビンソン・クルーソー漂流記のすぐれた価値を見出すというのは、イギリスでも同様であるように思われる。Everyman's Library 版の序文で、Guy N. Pocock は第一部が個人たることの最初にして最後の崇高なる正当化を行い、これがルソーに深い影響を及ぼし、ルソーの著作が他の何人のそれにもまして、フランス革命に影響を与えた<sup>6</sup>としている。一方、第二部については、一級の自伝的冒険譚であるが、第一部を不朽のものとした天才はもはやそこにはない、と片付けてしまっているからである。

## II. 『ロビンソン・クルーソーのその後の冒険』の世界

先にも述べたことだが、ロビンソン・クルーソーは、1694年甥のすすめもあって一介の貿易商として甥の船に乗り、東インド諸島へ渡るべくイングランドを離れ、一旦ブラジルに向い途中カリブ海にある、かつての孤島

6 Everyman's p. xi.

に立ち寄った後、再び冒険生活を経験しながらアフリカ・インド・中国を経てユーラシア大陸を横断して1705年にロンドンに帰着するという人生に時を送る。したがって、まずダニエル・デフォーの構図には、彼が好むと好まざるとにかかわらず当時のアジア前近代貿易の事実がとらえられているかなければならなかったし、またそれが明確に存在していることを指摘しておこう。

### 1. アジア前近代貿易<sup>7</sup>

アジア諸地域間の遠隔地貿易がヨーロッパの地理上の拡大が始まる前からすでに殷賑を誇っていたこと、大航海時代以後のヨーロッパ人が既存のインド洋世界の三角貿易に武力で侵入していったことについては、さしあたり注7の文献に依ることにして、ここでは第二部での関係部分を適宜とらえあげることとする。

さて、ロビンソン・クルーソーの積荷は何であったかという点、まず多量のリンネルと若干の薄地のイギリス製の毛織物 (thin English stuffs for cloathing) であった。これらは、かの孤島に残っているはずのスペイン人たちの衣料とするためであった。その他、彼らのための手袋・帽子など衣料品、寝台・寝具・湯わかしなどの家事台所用品、釘・かすがいなど工作用具もあった。それに武器類があった。この武器類にしても必要があればその一部は島に残していくことを予定しており、注目すべきは東インド諸島へ輸出する商品名を特に記すことはない点である——ただし、後段ペルシア湾のくだりでは、高価なイギリス製品をかなりと相当額の金をもっていったと記す (文庫本(下)263ページ, *Everyman's* p. 358)——。

7 川勝平太「木綿の西方伝播——アジア内貿易から大西洋経済圏へ——」、『早稲田政治経済学雑誌』第270・271・272合併号、1982年。第53回大会の共通論題「近代アジア貿易圏の形成と構造」を特集した『社会経済史学』、51巻1号、1985年。

8 文庫本(下)20-21ページ。 *Everyman's* p. 232.

かつての孤島に立寄り、ついで彼の乗船はブラジルから大西洋を横ぎってカペ・ド・ボン・エスペランスマり喜望峰に直航する。この船は貿易を目的とした航海の途上にあつたので、貨物上乗人 (a supra-cargo) が乗船していた。この上乗人は船が喜望峰に到着したあと、その運航などをすべて指揮することになっていた。また、船が寄港することになっている各々の港での碇泊期間は、傭船契約によってある一定の日数に定められていた。船長である甥と上乗人とが相談してこれらについては適当に処置した。喜望峰には真水を補給するのに必要な期間だけしか碇泊せず、船はコロマンデル海岸に向け急行する<sup>9</sup>——途中、マダガスカル島に寄港しているが、ここではとりあげないことにしよう——。

ここで興味ある事実には、この船には貨物上乗人が乗船しているだけでなく、喜望峰から東では運航などすべてを、この貨物上乗人が指揮するといふことがある。ヴァスコ・ダ・ガマの一行が、アフリカ東海岸のメリンドに到着してからあとは、代々水先案内を業とするイスラーム教徒によってカリカットにみちびかれたといふ事実<sup>10</sup>を想起する。デフォーはこの貨物上乗人が何国人であるか明示していないけれど——また仮にロビンソン・クルーソーと同国人であったとしても——、ヴァスコ・ダ・ガマがいわゆるインド航路を発見した時代の、インド洋航海上の慣例が残っていたことを示すものであろう。

さて、ロビンソン・クルーソーの乗った船はペルシア湾に向かって航行をつづけた。そこからは途中スラットに寄港するだけで、コロマンデル海岸に行くことになっていたが、貨物上乗人の主要計画がベンガル湾での外国取り引きということになり、もしそこで商談が旨く成立しない時は、さらに「シナ」まで船脚をのぼし、その帰航の途中、コロマンデル湾によ

9 文庫本(下)233-234ページ。Everyman's p. 343.

10 飯塚浩二『東洋史と西洋史とのあいだ』、岩波書店、1963年、69ページ。



る、ということになった。ところが、ペルシア湾にいた時、5人の乗組員がアラビア側に上陸して行方不明になった事件が切掛けとなり、<sup>11</sup>ロビンソン・クルーソーと乗組員の間には溝ができる。そのため、ベンガルで彼は乗組員のみならず甥ともわかれ一人で帰国の道をたどることになる。

ここで、手持ちの高価なイギリス製品を有利に処分し、初めからそのつもりであったので、極めて良質のダイヤモンドを数個買い込んだ。ここには、イギリス人、フランス人、イタリア人というよりはニダヤ人からなる数人の貿易商が滞在していた。そのなかのイギリス人の貿易商と共同出資で船を手に入れ、イギリス人の航海士・水夫長・オランダ人の船大工・ポルトガル人の平水夫、さらにインド人の船員を加えて、新たな航海に出る。この航海では、スマトラ島のアチンに行き、そこからシャムに行った。そこで商品の一部を阿片とアラック酒と交換した。阿片は「シナ人」の間では非常な高価で取り引きされ、当時需要の大きな商品であった。要するにサスカンまで行き、大航海をして合計8カ月の旅をして、再度ベンガルに戻った。これで多額の金を儲けただけでなく、また儲ける方法も見付け<sup>12</sup>た。

次の航海では、ボルネオやその他の島に寄港し、約5カ月で帰って来た。大成功だった。持ち帰ったのは丁子を主としてその他若干にくずくを含んだ香料であった。これをペルシア人の商人に売った。この商人たちは、これをペルシア湾の方に向けて運んでいった。5倍ちかくの値段で売ったので、大儲け<sup>13</sup>だった。

その後、今度は約200トン積みの、アジアで取引に従事していたオランダの沿岸貿易船を新たに入手して、丁子その他を求めて、フィリピンやモルツカ群島に向けて、またベンガルを出航する。ところが、この船の売手

11 文庫本(下)256-257ページ。Everyman's p. 355.

12 文庫本(下)263-266ページ。Everyman's pp. 358-360.

13 文庫本(下)268ページ。Everyman's p. 361.

が法律上正当な資格を有しない砲手にすぎないだけでなく、その一味によるいかかわしい横領行為であったことから、善意の取得者であるロビンソン・クルーソーは追手に追われ、結局清朝の中国に向うことになる。<sup>14</sup>

途中出会ったポルトガル人の水先案内人に案内して貰い中国は南京湾に向かうのだが、この水先案内人の質問に答えて、彼は積荷の阿片を売り陶器・キャラコ・生糸・茶・絹織物その他を買いつけ、ベンガルに戻りたいと答えている。<sup>15</sup>

ダニエル・デフォーは日本のことにも触れているが、日本から中国商品を買いにクインチャン (quinchang) に商人が渡って来ると記している。<sup>16</sup> この点は、日本がいわゆる鎖国体制、より正確にいえば徳川幕府による海禁体制下にあった時期の実態からは遊離している。イギリスが平戸貿易を最後に、日本からしめ出されたためにおきた情報の欠除に由来するものでもあろうか。しかし、ダニエル・デフォーが、注7に挙げた研究が明らかになっている、アジア前近代貿易の世界に関する情報を十分把握していたことは間違いない。前掲『社会経済史学』所収のK・N・チャウドウリ論文は、その貿易構成品目のうち貴重品・贅沢品・奢侈品についていうと、それはあまたの文明の物産よりなっており、香辛料・絹・薄地の綿織物・陶磁器・ガラス・装身具・見事にカットされた宝石類さらにサラブレッドの馬などであるとする。また、川勝論文は、「ヨーロッパ人が喜望峰回りのインド航路を発見するまでは、三角貿易の中継は主として回教徒商人の手によって行なわれていた。必ずしもアラビア商人ばかりではない。ペルシア人もいたが、主体はインド人 (特にグジャラート人)、ビルマ人、インドネシア人であった。彼らは胡椒・香辛料と引き換えにヨーロッパから銀を受けとり、この銀を『銀を底なしに吸い込む』インドに持ち運んだ。そ

14 文庫本(下)269-291ページ。Everyman's pp. 361-373.

15 文庫本(下)291ページ。Everyman's p. 373.

16 文庫本(下)299・306ページ。Everyman's p. 377, p. 381.

ここでインド木綿と交換され、続いてインド木綿は香料諸島に運ばれて今度は胡椒・香辛料と交換され、最後にこれらは西方に持ち帰られて銀と交換され、再び同じルートで東方に運ばれたのである」と述べる。

デフォーは、インド木綿については明示していないが、ベンガル——コ罗曼デル海岸とベンガルが、主要な木綿積出地であったことは、周知の事実に関する——を拠点としてアジア諸地域間の遠隔地間交易で金儲けをする世界を描いていることは明らかである。また、中国に持ち込む商品として阿片を、早くからあげていることも注目する必要がある。

## 2. 中国・ロシア論

ベンガルに中国から再度戻るといふ当初の計画をとりやめ、ユーラシア大陸を横断してロビンソン・クルーソーは北京から帰国することになる。かのオランダ船購入の共同経営者それにポルトガル人の老水先案内人も含めて、馬の数は300頭から400頭、人数は120人以上の大隊商を組んでのことであった。南京で、緞子それに金糸織りを含めているんな種類の美しい絹織物・大量の生糸その他の商品——これだけで英貨3,500ポンド分——、それに茶や美しいキャラコやにくずくや丁子も買い込んだ<sup>17</sup>。

こうして後にすることになる中国であるが、ダニエル・デフォーが、ロビンソン・クルーソーを借りて語る中国観は、侮蔑感に満ちている。それについては、すでに本稿の冒頭でも引用することがあったが、もう少し紹介しておこう。

シナ人の航海術も商業も農業も、その国力や威容と同じく、やはり不完全で無力であり、ヨーロッパのそれらと比較すべくもない。知識や学問や科学上の技術についても、同じことがいえる。彼らは地球儀も天体儀ももっており、数学の知識も多少ないわけではない。しかし、

17 文庫本(下)328ページ。Everyman's p.392.

その知識を少し追及して問いただしてみると、彼らの中の最も賢明な学者といえどもなんと視野の狭いことであろうか。<sup>18</sup>

このあとも、蜿々と隣れみの情をも込めて語る中国社会批判は続き、「名だたる彼らの創意工夫の才能も、もはや今日跡方もなく消え去っている」と、その中華思想を断ずる。その郷士の姿は、「全くドン・キホーテ的という他はなく」と、<sup>19</sup>切って捨てる。

そして、万里の長城については、こう記している。

その後二日たって、われわれは万里の長城を越えた。この長城は、韃靼人の侵入を防ぐために造られた堡塁で、まさしく巨大な構築物であった。それは丘を越え山を越え、ただわけもなく蜿々とつらなっていた。(中略)長城を世界の驚異だと激賞してやまなかったわれわれの隊商の案内人が、しきりに私の意見を求めてきた。韃靼人の侵入を防ぐのには実に見事な出来栄えだ、と私は彼にいった。ところが、彼は私のいった意味がどうにも理解できなかつたらしく、私が長城を褒めたのだと思ったようである。だが、老水先案内人はそれを聞いて笑い出した。「なるほど、イギリスのお方ですな。色々いわれますね」と、彼はいった。

と記して、ポルトガル人の老水先案内人の口を借りて、韃靼人だけしか防げない代物であるときめつけ、ロビンソン・クルーソーには強力な砲列をしいたイギリスの軍隊あるいは地雷工兵二個中隊で、これをやすやすと打破ことができると語らせる。<sup>20</sup>歴史の現実には、万里の長城を打破ってではなく、19世紀も半ば近くに砲艦によって海岸部から清朝の中華帝国は、イギリスを先頭とするヨーロッパ列強——その隊列の後尾にすべり込んだのが日本である。先に引用した徳川齊昭の『戊戌封事』の言を思う時、ま

18 文庫本(下)318ページ。Everyman's p. 387.

19 文庫本(下)321ページ。Everyman's p. 388.

20 文庫本(下)333-334ページ。Everyman's pp. 394-395.

さに今昔の感ありと云うべきであろう——によって、その防衛網を突破される。が、韃靼人は防げて、もはやこの時点で既にイギリスの敵たり得ないとい切のデフォーの発言は、その後の歴史の歩みから顧みる時、注目に値する。イギリスの中国に対する自信を、同国の読書人の心の中に植えつけたと想像しても、決して的是ではあるまい。学者それにジョナサン・スウィフトをはじめとする文学者は、デフォーのこの書を軽く見なそうとしたが、大衆はそうではなく、彼らの最も好きな書物のひとつであった<sup>21</sup>、とされているだけに、この点は強調しておこう。

次に、ロシア観はどうであったであろうか。本稿冒頭で引用した部分に続いて、以下のように述べる。

一言でいうと、シナがモスクワ帝国から途方もなく遠く離れていないで、またシナ人と同じようにモスクワ帝国が粗野で無能力で悪政に呻吟している奴隷の集団でなかったら、この帝国の皇帝（ツアー）がただ一回の遠征でシナ人を全部その国土から追い出してそのことを証明することも易々たるものであろう。この皇帝は、その後私が聞いたところによると、隆盛を誇る君主となり、世界の脅威となりかけているようであるが、もし彼がああ勇武を誇るスウェーデン人を攻撃などしないで、その鋒先をこのシナの方に向けていたなら、その攻略に対しヨーロッパの列強の反撥や妨害などありえなかったであろうし、今頃はシナ帝国の皇帝になっていたかもしれなかったろう。<sup>22</sup>

という具合に軽侮の念は隠さないが、ロシア人はどうにかキリスト教徒の部類に属するとして、中国人や韃靼人よりは高く評価する。

四月十三日、ついにモスクワ帝国支配下の領土の国境に達することができた。モスクワ帝国の皇帝（ツアー）に隷属している最初の都市

21 Everyman's pp. x-xi.

22 文庫本(下)317ページ。Everyman's pp. 386~387.

(町とも要塞とも、その他何と呼んでもいいが)は、アルグンという名であった。それはアルグン河の西岸にあった。私は、こんなにも早く私のいうキリスト教に、少なくともキリスト教徒が統治している国に到着したことに無限の満足感を覚えないうけにはいかなかった。というのは、ロシア人は、私の考えによれば、どうにかキリスト教徒の名にそむかない程度の者にすぎないが、それにもかかわらず、彼らは彼らなりにキリスト教徒と自負しているし、また敬虔でもあるから<sup>23</sup>である。

ロビンソン・クルーソーすなわちデフォーにとっては、モスクワ帝国は中国とならんで粗野で無能力で悪政に呻吟している奴隷の集団であるが——こうしたロシア観が、陰に陽に、その後のイギリスの対露政策に一貫してあることは否定できないであろう——、ロシア人はキリスト教にともかく属する点を、中国人などよりは文明人であると肯定的に評価する。彼は、「次第にヨーロッパに近づくにつれてあたり一帯はそれだけ住民の数も多くなり、またそれだけ文明の恩恵に浴しているはずだ<sup>24</sup>」という風に、韃靼人やツングース族の住む大地を旅する間、考える人であった。

要するに、偶像崇拜や多神教的な信心の世界は文明に値しないのである。

### 3. 宗教論

先のアルグン到着を記す一節の続きは、こう記される。

こういった感慨は、私のように世界を股にかけて旅行をした人間なら、またいやしくもものを考える力をもっている人間なら、誰しももつものである。つまり、そういった人間なら、神と贖罪主の御名が

23 文庫本(下)347ページ。Everyman's p. 401.

24 文庫本(下)369ページ。Everyman's p. 412.

知られ、崇められ、拜まれている世界に再びもどってくるということが、どれほど有難いことかを痛切に感ずるであろう。この世界は、天によって見放されて度すべからざる迷妄に陥った人間どもが、ひたすら悪魔を拜み、木石の前にひれ伏し、怪物や地水火風や恐ろしい動物の像や怪物の彫像・画像を拜む世界とは全く違う別な世界なのだ。われわれが通過した町や都市には、例外なしに、塔（パゴダ）があり、偶像があり、寺院があった。無知な住民は自分たちの手で作ったものさえもそこでは拜んでいた。<sup>25</sup>

ツングース族の地では、以前経験したよりももっとひどい偶像崇拜と野蕃さを見せつけられたが、「ロシア人に征服され、すっかり鎮定されていたので、そんなに危険ではなかった。しかし、行儀の悪さや偶像崇拜や多神教的な信心という点にかけて、世界中でも彼らにかなう民族はいなかった<sup>26</sup>」、あるいは「オビ河とエニセイ河の中間の地帯は、全く異教的な地帯であって、その住民は僻遠の地に住む韃靼人にも劣らないほど、いや、私の知るかぎりでは、アジアやアメリカのどの種族にも劣らないほど、野蠻であった」と、書き綴っていく。<sup>27</sup>

ロビンソン・クルーソーの世界においては、キリスト教は文明の使徒なのである。台湾島民が行儀作法がいんぎん丁重であることを述べる箇所ではこう記す。

こういったことは、ついぞ他の国民に見かけないところであって、かつて新教のオランダ人宣教師によって植えつけられたキリスト教の名残りによるものであったろう。そしてまた、私がしばしばいつてきたこと、つまり、キリスト教が受け入れられた所では、その住民を霊的に救済できるかどうかはともかくとして、キリスト教が彼らを教化

25 文庫本(下)347ページ。Everyman's p. 401.

26 文庫本(下)369ページ。Everyman's p. 412.

27 文庫本(下)371ページ。Everyman's pp. 412-413.

し、その行儀を改善するのが常であるということ、の一つの証左といえよう。<sup>28</sup>

こうした考え方から、異教徒の偶像を焼打ちすることも是認される。ロビンソン・クルーソーは、他の2人のスコットランド人とともに、韃靼人の村を襲い、村人を縛りあげた上、彼らの信仰の対象である目ざわりな偶像をすっかり焼きつくす。このために、韃靼人の追跡を受けることにもなる。この襲撃を計画する際、彼は、以前マダガスカルで仲間の一人が殺害された事に対して、いかにその村を焼き払い掠奪したか、いかに女や子供を殺したかを語り——文庫本(下)235～255ページ、Everyman's pp. 344-354にその具体的描写がある。大航海時代以後展開するヨーロッパ勢力の、進出先原住民に対する掠奪、虐殺の様相をその発端から一件落着までを叙述している——、われわれもこの村を同じように始末すべきだと付け加えている(なお、これは、ロシア人が一人、礼拝中の韃靼人を侮辱したために捕虜となりついに焼き殺されたという話を耳にした後の提案という形をとっている)が、それでは余りに偶像が多すぎて無理であると意見されたので、当面目ざわりな偶像だけを破壊することにしたのであった。<sup>29</sup>

キリスト教以外の異教徒や多神教には極めて戦闘的であるが、プロテスタントとカトリックについてはその融合された世界を構想する。何よりも、一神教のキリスト教が最高・最善なのである。遭難中の帆船から救い出されたフランス人の聖ベネディクト派の司祭にこう語らせている。

いかなる方法であれ、全知全能のキリストがよしとし給う方法によって、あなた方全部の人々がキリスト教会にたち戻られることを、私は毎日祈っております。それまでは、新教徒と異教徒とははっきり区別することは、カトリック教徒としての私の立場と矛盾しないことをお

28 文庫本(下)290ページ。Everyman's pp. 372-373.

29 文庫本(下)354-367ページ。Everyman's pp. 404-411.



認め願えると信じます。何しろ、一方は、真実な信仰にもとづくとは私には思えませんが、とにかくあるやり方でイエス・キリストの御名をとなえて祈っておりますし、他方は、神も知らず、キリストも知らず、贖罪主も知らない蛮人であり未開人なのですから。

これに対して、ロビンソン・クルーソーには、次のように語らせている。

この司祭が、同じような愛の心があればわれわれプロテスタントもすべてカトリック教徒となるはずだ、と考えたように、私は私で、もし司祭の属している教会の全ての信者が同じような穏健な心をもつようになれば、彼らもすべてプロテスタントになるだろうと信ずる、と彼にいったのであった。<sup>30</sup>

まことに、デフォーにとっては、一神教の中でもキリスト教こそがもっともすぐれた宗教であった。そのためにこそ、カトリックとプロテスタントの融合を夢みる。これに対して、多神教、偶像崇拜の世界は蕃人、未開人の世界であり、早晚キリスト教によって教化され文明化されねばならぬ世界なのである。書かれた契約書 (contract) によって成立する結婚のきまりは、秩序と公正を維持し、男が女房から逃げだし子供を捨て無茶苦茶に互に交わることを改めさせ、家族をきちんと守らせ、遺産が法定相続人によってつがれることを保障する。<sup>31</sup>キリスト教こそが、これを可能にするのである。「こういった（島の住民たちに彼が教え込んだところの…藤田注）結婚は、わが本国の牧師によって結婚させてもらうのと同様に、イギリスにおいても正式で有効なものとして承認される十分な資格がある、と私は信じた」<sup>32</sup>と、ロビンソン・クルーソーに語らせる。

自立した個人としての男・女相互間に契約によって成立する結婚、その上に構成される家族、その家族の一員への法定遺産相続といった人間関係

30 文庫本(下)182-183ページ。Everyman's pp. 317-318.

31 文庫本(下)156-159ページ。188ページ。Everyman's pp. 304-306, p. 320.

32 文庫本(下)158-159ページ。Everyman's p. 306.

のあり方が描かれる。一夫一婦制の単婚家族と私有財産制という制度的枠組による類的存在としての人間社会のリプロダクション (reproduction 再生産と繁殖) の世界である。

#### 4. 環大西洋三角貿易

第2部が語るその後の冒険で、イングランドを離れ、先づブラジルへ向う際、ロビンソン・クルーソーの乗船は帆船に遭遇し、その生残りの乗組員や乗客を救う。この船は、颶風や嵐のために、とんでもない方角に流され、マストなども失ってしまっていた。ここで、注目すべきは、この船がブリストルの船で、バルバドスから故国へ航海する途中であったこと、それに食糧はすでに欠乏してパンも肉も全くなっていたが、飲料水がいくらかと半樽ほどの麦粉があったとした上で、さらに「砂糖は充分まだあった。砂糖漬果物や菓子類は初めこそかなりあったが、もうすでに喰べつくされていた。ラム酒は七樽あった」と、記していることである。<sup>33</sup> また、さらに後段で、幸運にも救助された若い女性に、ロビンソン・クルーソーは、飢えるということはどういうふうな状況に陥ることかと質問する。これに対して、縷々説明が加えられるが、そのなかでこう語らせている。「残っているものは、砂糖と少しばかりの葡萄酒と少しばかりの水だけになりました」。「残っていました葡萄酒の最後の杯を飲みましたが、その際、栄養を補う成分があるということで、砂糖を入れて飲みました。しかし、胃の中には消化しようにも消化するものが何も入っておりませんでしたので、葡萄酒のききめは嫌な臭気を胃から口もとまでもたらすだけでした」。「砂糖を入れた水を一口飲みましたが、胃が砂糖を受けつけませんでしたので、全部吐きだしてしまいました。こんどは砂糖なしの水を一口飲みました。これは別にもどしませんでした」。<sup>34</sup>

33 文庫本(下)35-36ページ。Everyman's pp. 239-240.

34 文庫本(下)211-215ページ。Everyman's pp. 332-333.

この描写は、当時存在した環大西洋三角貿易を前提として生れて来ているといわねばなるまい。

ここで、先学の業績を借りて、環大西洋三角貿易に関連する知識を書き出しておくことにする。

ヨーロッパ諸国の場合も、イギリス領アメリカ植民地の場合も、黒人奴隷貿易は、たいてい三角形の周回を一周する大循環路をとっておこなわれた。ヨーロッパ諸国の場合は、安いヨーロッパ製品をまずアメリカに運び、ここでそれを奴隷にかえて、大西洋のかなたの新大陸に運び去る。新大陸に運びこまれた奴隷は、この地の特産物その他の品々と交換されて、ふたたび海を渡ってヨーロッパにもち帰られる。イギリス領アメリカ植民地の場合は、この循環路はニューイングランド—アフリカ—西印度諸島を結ぶ三角形となるのが、もっともふつうである。ニューイングランドからアフリカへはラム酒が運ばれ、ここでラム酒は奴隷にかえられ、こうして西印度諸島にもたらされた黒人奴隷はラム酒製造のための糖密に姿をかえて、ふたたびニューイングランドに帰ってくる。こうした循環貿易は、いわゆる「三角貿易」として知られるもののひとつ<sup>35</sup>。

上記は、注35の書名からも推測できるように、その問題意識がアメリカ黒人史にあるから、記述の仕方は本稿の行論に過不足なくおさまるものではないが、当時環大西洋三角貿易が存在したことと、それが大体いかなる仕組みのものであったかを理解するには役立つ。またのちに明らかになるごとく、ロビンソン・クルーソー物語に表現される経済社会のありようを理解するのに有用でもある。

1600年には、イギリスはカリブ海域には全く植民地を有しなかったが、1700年までにはオランダ・フランスのいずれよりも多くの植民地を有する

35 本田創造『アメリカ黒人の歴史』, 岩波書店, 1964年, 37ページ。

こととなった。その最初の島がバルバドスである。1655年ごろには、年々、7,000トン以上の砂糖がこの島で生産された。1670年までに、バルバドスは新大陸における主要甘蔗栽培地域として、ブラジルに追いついていた。多くのアフリカ黒人奴隷が、労働力としてこれらの地域に輸入された。<sup>36</sup>

環太平洋三角貿易において、新大陸の産物——その代表として砂糖があるわけである——は、奴隷労働によって生産されたのが、歴史の現実であった。が、ダニエル・デフォーすなわち、ロビンソン・クルーソーは、奴隷制を容認しない。彼から農園を分け与えられて、例の孤島——彼は、これを自らが有する植民地であると記す——で生活することになる白人と蛮人の社会関係について、こう記している。

今やこうやって一種の共和国を作って仲間同士生活を送るようになり、しなければならぬ仕事は沢山あるということになると、三十七人の蛮人（インディアン）を島の一角に放りっぱなしで仕事もさせないで住まわせておくのは、いささか妙な話だということであった。時にはかなり難渋していたが、蛮人たちは食糧の自給自足のために働いていた。それ以外には仕事もなければ、管理すべき土地・財産の類は何もなかったのだ。したがって、私は首領のスペイン人に提案して、フライデイの父親をつれて蛮人たちの所に行ってみてはどうか。そして、今の場所から移って、自分たちだけで土地を開拓するか、それともいくつかの家庭に奉公するか、そのあたりはどうか彼らに訊ねてみたらどうだろうか、といった。奉公するといっても、労力に対して生活の面倒を見てもらう召使としてであって全面的な奴隷としては

36 Nick Rowling, *Commodities*, Free Association Books, London, 1987, pp.54-56. なお、甘蔗糖の生産には多量の労働力を要すること、また新大陸では黒人奴隷の労働力が当られたことについては、Fernand Braudel, *Civilisation Matérielle et Capitalisme*, Librairie Armand Colin, 1967 の166ページ。また、167ページに掲載の図39も参照されたい。

ないことは無論であった。私は島の住民が力によって蛮人を奴隷にするということをとうてい認めることはできなかった。蛮人たちは協定によって、つまりいわば降伏の条件として自由を与えられていた。島の住民もそれを破るべきではなかった。<sup>37</sup>

### Ⅲ. 『ロビンソン・クルーソーの生涯と冒険』の基盤

大塚久雄や平井正穂がとらえる理想化された経済人・工作人としてのロビンソン・クルーソー、また Guy N. Pocock のとらえる個人たることの崇高性を体現したロビンソン・クルーソーの生涯と冒険には、現実社会の基盤が、前提としてあることを、見逃すことはできない。環大西洋三角貿易の経済循環構造の中に、ロビンソン・クルーソーは身を投じて富を獲得蓄積する。第一部には、それがはっきりと叙述されている。

彼は、ギニア沿岸の航海から帰って来ていた船長にすすめられて、まずそこに出かける。船長はギニアで大儲けをしたことに味をしめていた。船長の指図で、彼は金額にして 40 ポンドの玩具や安物の雑貨類を買いこんだ。資金は親類からかき集めた。この航海で彼は一人前の船乗りとなり、一人前のギニア貿易商人となった。5 ポンド 9 オンスの砂糖を持ち帰り、<sup>38</sup> ロンドンで売ると 300 ポンド近い金となった。

二度目のギニア行きの時、トルコ海賊船に襲われ、ムーア人の奴隷にされるが、首尾よく脱走し、ギニア沿岸地方へ黒人奴隷を買に行くポルトガル船に運よく救われ、<sup>39</sup> ブラジルへ渡る。

ブラジルでは、インゲニオ、つまり農園と製糖所とを経営していた人の

37 文庫本(下)205-206ページ。Everyman's pp. 328-329.

38 文庫本(上)29-30ページ。Everyman's pp. 14-15.

39 文庫本(上)30-52ページ。Everyman's pp. 15-27.

ところに、しばらく厄介になり、農園の経営法や製糖法を覚えこむ。ついで、有金をはたいて未開墾地を買いこみ、最初の2年間は食糧の自給、3年目には煙草を少し植え、次の年には甘蔗を植える計画をたてた。<sup>40</sup>

こうやってブラジルでおよそ四カ年もくらし、農園経営も非常にうまくいったわけだが、そうこうしているうちには土地の言葉も覚えたとし、私と同じような農園経営者たちとも、もよりの港であるサン・サルヴァドルの貿易商人たちとも、ずいぶん仲良くなった。こういう連中としばしば話合っているあいだに、私はギニア沿岸へ二度も航海したことや、そこでおこなった黒人との取引の仕方などについて話をしたことがあった。そこでは、たとえば数珠玉・玩具・小刀・鋏・手斧・ガラス製品といった安もの雑貨で、砂金・薬用種子・象牙などのもちろん、ブラジルで使う黒人もいくらかでも交換できるということも話した。<sup>41</sup>

この話を聞いた、知合いの商人や農園主のうちの三人と、彼は彼らの要請に従い、ともにギニアに黒人を入手すべく、航海に出かける——この時の難船、一人オリノコ河の河口の名も知れぬ孤島に漂着してからの物語が、今もなお人口に膾炙する部分である——。この航海に出る際、彼は、留守中の農園の世話の依頼をするほか、死んだときのことを考えて、農園および動産の処分に関する正式の遺言書も作った。包括相続人は、命の恩人であるポルトガルの船長に定め、遺言書のなかで船長は彼が指定したとおりに彼の動産の処分をする義務があること、すなわち農産物の半分は船長がうけとり、他の半分はイギリスに送るべきことを約定した。なお、この時の積荷も大きな積荷はひとつもなく、黒人との取引に手ごろな安もの雑貨だけであった。たとえば、数珠玉・ガラス製品・貝殻製品、その他

40 文庫本(上)52-53ページ。Everyman's pp. 27-28.

41 文庫本(上)58ページ。Everyman's p. 30.

こまごましたもの、とくに小さな鏡・小刀・鋏・手斧なのであった。<sup>42</sup>

さて、ロビンソン・クルーソーは、幸運にも苛酷な神の試練にも耐え、冒険の末、イギリスに戻る。が、出発前に財産を託していた婦人に、その生活の窮乏を救うべく、<sup>1</sup>なけなしの貯蓄からこれをさいて与える。一方、彼が助けてやった船長などから、その行動をほめたたえられ、贈り物として正貨200ポンドの現金をもらう。しかし、これくらい金があっても生活の方針がたつわけでもないということで、リスボンに行き、ブラジルに残して来た農園の情報を手に入れることにする。ここで、彼は運よく、その農園からの収益を受けとることができた。現金で正貨5000ポンド以上の金持ちになり、年収1000ポンド以上の不動産をブラジルでもつことになった。その農園では彼の不在中も砂糖と煙草を作っていたのであった。共同経営者からの手紙は、農園がどんなに改良され、一年にどれくらい収穫をあげているか、働いている奴隷の数などについても情報を伝えてくれ<sup>43</sup>た。また、この共同経営者は鋳造していない金を100箇送って来た。同じ便船で、二人の農園管理人からも砂糖1200箱、巻いた煙草800本も送って来た。

この後、ローマ・カトリック教に対する若干の疑念と異端審問に対する殉教の覚悟がつかないことから、再度ブラジルへ渡航することを断念したため、ブラジルの農園を売却し、さらに、スペイン弗貨32,800枚分の為替手形を土地代金として受けとる。<sup>44</sup>

ロビンソン・クルーソーが、ベッドフォード州に小さな農園を買って移住し、中流の生活をするのは、この後のことである。その資金が、例の環大西洋三角貿易の中での彼の経済活動によるものであったことはもはやいうまでもない。いうところの中流の生活 (the middle state of life) の描写

42 文庫本(上)58-61ページ、287-288ページ。Everyman's pp.31-33, pp.156-157.

43 文庫本(上)370-380ページ。Everyman's pp.202-207.

44 文庫本(上)405-406ページ。Everyman's pp.220-221.

が、第二部『ロビンソン・クルソーのその後の冒険』の冒頭、アジア前近代貿易の世界に乗り出す前の部分にある。ダニエル・デフォーの叙述が、こういう配置になっていることの意味は、意義深いと思われる。いずれにしても重要だから、当該部分を次に引用する。

このために、私はベッドフォード州に小さな農園を買って、そこへ移住する決心をした。農園には小さくて便利な家があり、その家の周辺の農地には大改良を加える余地が充分にあり、したがって、土地を開墾したり経営したり植えつけをしたり改良したりすることに生まれつき関心をもっていた私には、いろんな点で好都合であった。特に、そこが内陸の土地だったので、世界の遠い地域と関係のある船や船員などといったものと交渉が絶たれることが好都合だったのである。

要するに、私は自分の農園に引き越した。家族一同をもおちつかせ、犁・馬鍬・荷車・荷馬車・馬・牛・羊も買い入れた。熱心に仕事をやったので、半年たつうちには立派な一人前の地主 (a country gentleman) になった。使用人の監督とか、土地の開墾とか、畦い込みや植えつけなどの仕事で、私の頭はいっぱいであった。こんなふうにして、思うに自然が人間に示しうる、或いは、災難を背負って生まれてきた人間が最後に引退して享受しうる、最高の快適な生涯を、私はおこなうことになった。

私は自分の土地を耕作した。地代を払う必要もなかったし、どんな契約にも拘束されることはなかった。樹木を引きぬくことも切り倒すことも、思いのままであった。植えつけをするのも自分のためであり、改良するのも家族のためであった。こうやって、放浪への誘惑を捨ててしまうこと、この世に関する限り、生活に何一つ不満に思うことはなくなった。そうになると、父があんなに熱心にすすめていた中流の生活を今自分は営んでいるのだ、いわば一種の天上の生活をおくってい



なのだ、という実感がわいてきた。田園の生活について詩人が歌っている文句に似た生活をおくっているというわけであった。

悪徳もなく不安もなく

老人は苦を、若者は<sup>45</sup>感<sup>45</sup>いを感じず。

#### IV. 時代の子, ロビンソン・クルーソー

先に注2でことわったように、本稿は第三部『ロビンソン・クルーソー反省録』に全く目を通すことなく、筆を運んでいる。Guy N. Pocockが第三部は読みづらいこともあって、100万人に1人も読んではいないであろうといってるからとて、本稿の作業法には怠慢のそしりを免がれがたいところがある。が、それを承知の上でも、この我流読書ノートは諸賢の厳正な批判を乞う意味があるであろうと不遜にも考え、あえて「試み」との語を付加して公開することにする。

さて、第一部と第二部をともに視野におさめるとき、ロビンソン・クルーソーの生きた現実の世界は、アジア前近代貿易と環大西洋三角貿易が、脈々と波うち機能している時代のイギリスであったことが明確に描かれていることに気付かざるを得ない。久米の仙人ならいざ知らず、全ての人間は現実の経済社会の中に生活の方便を求めて生きている。時にはその現実の流れの中に呑み込まれ埋没しそうになるが、何とか踏みとどまり、理想の人間界を脳裡に描き、これを夢みる。それが人間というものであろう。

だとすると、大塚久雄のように歴史学・経済史学がすでに解明して来ているアジア前近代貿易と環大西洋三角貿易の世界にあえて目をつぶり、第一部だけをとりあげてロビンソン・クルーソーの人間像を、孤島といういわば抽象化された小宇宙を舞台に論じたり、また平井正穂のように第二部

を視野に入れることがあっても、自己愛とか神の摂理という形而上的分野に局限することには、何らかの批判が後学のものによって加えられてしかるべきであろうと私は考える。

ダニエル・デフォーは、環大西洋三角貿易という現実の経済循環の仕組みの中で、富を蓄積したロビンソン・クルーソーが、そうした仕組みから離れ、この時稼いだ資金をもとに、ベッドフォード州に農園を購入し、カントリー・ジェントルマン (a country gentleman) として静かに生きる、その時のあり方を中流の生活 (the middle state of life) といっているのである。この地には、「そこが内陸の土地だったので、世界の遠い地域と関係のある船や船員などといったものと交渉が絶たれることが好都合だった」ので、「一種の天上の生活をおくっている」という実感すら、ロビンソン・クルーソーはいたく、という具合にデフォーの筆が記していることを見逃すべきではない。

ところで、ロビンソン・クルーソーが孤島に辿りついた頃の環大西洋三角貿易には、まだ木綿は登場しない。だから、孤島で栽培する食料用作物に米・大麦・葡萄が記されても、衣料用作物として綿を植える話は出て来ないのである。<sup>46</sup>従って、孤島で自ら作る衣料品は、山羊皮製となるのである。<sup>47</sup>オリノコ河河口の酷熱の地であるにもかかわらず。マンチェスタ紡績業が登場する前の話であるから、綿織物は出て来ずリンネルと薄地のイギリス製毛織物であることも付け加えておかねばなるまい——アダム・スミスが『諸国民の富』で例としてあげる織物が、亜麻布・絹織物・毛織物であり、<sup>48</sup>綿織物が上ってこないかに見えることと同じ理由、すなわち時代・時期の問題というべきであろう——。砂糖きびを孤島で見つけてはいるが

46 文庫本(上)143-144ページ。208ページ。Everyman's p. 77, p. 112.

47 文庫本(上)203-204ページ。Everyman's p. 110.

48 大内兵衛、松川七郎 訳『諸国民の富(+)』、岩波文庫本、岩波書店、1959年、のたとえば102, 104, 208, 209, 248, 260, 325, 364ページ。

野生のままのもので、<sup>49</sup>ブラジルで栽培したものとはちがうと片附ける。以後、砂糖きびの話は出て来ず、彼の植民地ということになる島の住民たちに、その栽培法を教えることもない。その栽培生産には黒人奴隷を要することから、奴隷制を否定する境地に到達するロビンソン・クルーソーにはふさわしくない作物であると、デフォーは考えたのであろうと思われる。

さて、こうした環大西洋三角貿易の世界をはなれ、世界の他の遠い地域に手を出さずに内陸の農園で独立自営農として理想的な人間の暮らしを送り、その生涯を終えるかにみえたロビンソン・クルーソーが再びイギリスを離れ、今度はアジア前近代貿易の世界に乗り出して行くという物語に仕立てているところに、デフォーの、人間の理想像は理想像としてしっかり把握し概念化しながらも、生身の人間の世界から目をそらさない、鋭い現実感覚があることに一驚せざるを得ない。彼の中国論・ロシア論には後の歴史の流れからみて舌を巻かざるを得ないものがあることは、すでに紹介したので再論しない。

それでは、デフォーは、ロビンソン・クルーソーに仮託して、イギリスを含むヨーロッパ勢力のアジア進出の推進力を一体何に求めていたのだろうか。<sup>50</sup>プロテスタントとカトリックの融合した上での一神教のキリスト教こそ文明そのものであるという宗教観、そのすさまじいまでの優越感に、かなり大きなものを求めていたと、私には思われる。先に紹介した韃靼人の村の偶像破壊の場面を想起したい。ところが、実は、そのロビンソン・クルーソーが、孤島の生活で蛮人に出あった時には、以下のような感想を記すという筋書きになっている。

つぎに私が思いついたことは、彼ら(蛮人……藤田注)お互い同士の

49 文庫本(上)136ページ。Everyman's p. 73.

50 19世紀については、技術の要因をも十分考慮すべきだとする最近の業績として、D. R. ヘッドリック著、原田勝正・多田博一・老川慶喜訳『帝国の手先 ヨーロッパの膨張と技術』、日本経済評論社、1989年がある。

やり口は以上のように鬼畜同然であるが、それはそれとして私にはまったくなんの関係もないことだということであった。彼らはまだ私になんの危害も加えてはいないのである。もし彼らが私に危害を加えようとしたり、あるいは私が直接自分の身を守るために彼らを斃さなければならないということにでもなれば、私の言い分もたつというものであった。しかし、私はまだ彼らの力の及ぶ範囲外にいたし、彼らもまた私のことをよく知っていたわけではなかった。だとすると私のほうから攻撃するいわれは少しもなかったのだ。もし私のほうから攻撃することが正当だというなら、スペイン人がアメリカで行なった無数の土人を殺害するというあの野蛮行為も正当だといわなければならないだろう。土人たちは偶像を崇拜する未開人で、たとえば人間を偶像に犠牲として供えるような、血なまぐさい野蛮な儀式をいくら行なっていたかもしれないが、スペイン人にたいしては、まったくなんの罪もおかしてはいなかったのだ。それなのに、これらの土人たちをスペイン人はその国土から一人のこらず殲滅してしまったのである。<sup>51</sup>

以上によって、ロビンソン・クルーソーの世界は、第二部に描かれた現実の世界認識を手がかりに、あらためて第一部を読み直すと、今までよりずっと現実の歴史過程に立脚したものとなったように思う。Nick Rowlingは、産業資本主義はランカシャーの暗い悪魔のような工場からではなく、まず西インド諸島のプランテーションにあらわれた<sup>52</sup>、とまでいい切っているが、これもまた極端すぎるとは思いますが、イギリスの産業革命推進の中核層となった「中等の身分の人々」のモデルとされたロビンソン・クルーソーが、環大西洋三角貿易構造の中に生活し、そこから蓄えた資金でベッドフォード州に農園を買い、中流の生活を送ることになったと、デフォーが記していることだけはどのようにも否定しようがないのである。(1991年12月2日)

51 文庫本(上)232ページ。Everyman's pp. 125-126.

52 前掲, *Commodities*, p. 53.

（追記）

初校の段階で、落合幸二『ロビンソン・クルーソーの世界』（彩流社・1984年）を手にすることが出来た。本書も、また、大塚久雄・平井正穂と同様な視角で、ロビンソン・クルーソーの世界をとりあげている。「ロビンソン・クルーソーこそは、まさにこうした道（近代資本主義を内からおしすすめる西洋合理主義の本質的理解への糸口…藤田注）を準備する宗教的経済人の原初型態（典型）といえるのではなからうか。章を改めてこの問題を、物語第一部と第三部《反省録》を読み進めながら考えてみたい」（181ページ）とまで明言している。